

学会 報告

日本医療 コンフリクト・マネジメント学会 第6回学術大会

常任理事・医療安全・医事法制部長 水谷 匡宏

日本医療コンフリクト・マネジメント学会第6回学術大会が平成29年1月21日に東邦大学医学部講堂において、同大医学部教育開発室廣井直樹教授の会長のもとで開催され、参加者は280名であった。今回のテーマは「医療系教育での展開」についてであった。

現在の医学教育では患者と医療者との医療に対する理解度の違いが生じた場合に、各大学ではどのようにコンフリクト対応を行うのか、すなわち実際の授業の現場で、どのようなカリキュラムが生まれ、実践しているのかなどが報告された。また、医療対話推進者の養成については厚労省、日本医療機能評価機構、地域医療安全推進者センターの実践者からそれぞれの立場で発表があり、討論された。次いで特別講演が立教大学社会学部教授の犬生定義講師より「医療系教育におけるプロフェッショナルリズム教育」との演題名で行われた。その講演内容を要約すると以下のとおりである。

医のプロフェッショナルリズムについては公益性、道徳性、専門性が常に要求され、その内容は複雑で正解がないのが現状である。その理由として、医師は患者と社会に対して両立しえない「二重忠誠」を求められているからであり、それを解決するには個々人の最善の実践が必要であると結論づけた。講演要約を以下に掲載する。

＜講演要旨＞

医のプロフェッショナルリズムは、一人ひとりがそれなりに心に持っていればよいという認識では済まされない。患者・家族、社会（社会資本）に対して適切なチームを組織しての医療を提供するために個々の医療専門職や医療組織（集団）が具備すべき資質であり気概である。

組織の評価の仕方も変化しており、形式的評価ではなく患者、家族、住民を含めた統括的評価、いわゆる360度評価を実践することによって、医療人としての基本的姿勢を身につけていく取り組みも行われている。

プロフェッションとは「複雑な知識体系への精通および熟練した技能の上に成り立つ労働を核とする職業であり、複数の科学領域の知識あるいはその修得、ないしその科学を基盤とする実務が自分以外の

他者への奉仕に用いられる天職であり、その構成員は自らの力量、誠実さ、道徳、利他的奉仕、および自らの関与する分野における公益増進に対して全力で貢献する意志（commitment）を公約（profess）する。

専門職について特に医師はまさに公益性、道徳性、専門性が強く求められている。医師および医師集団は、意識する意識しないに関わらず無書面の契約を結んでいるとされる。普段は意識しなくても医療訴訟など紛争になると無書面の契約関係は当然のこととなる。

プロフェッショナルリズムは、専門職の集合的行為の総意、あるいは個人的理解、リフレクション、思慮深い行為により獲得されねばならない社会的プロセスである。

医師は社会や患者から多面的な期待を持たれている。医師の多様な役割は、臨床能力・コミュニケーションスキル・倫理的・法的理解の土台の上に立つ卓越性・人間性・説明責任・利他主義の4つの柱でプロフェッショナルリズムを支えている。

オスラーは「医療はアートであり、取引ではない、使命であって商売ではない。その使命を全うする中で、その心を頭と同じくらい使うことになる」とミッションとしての医療を述べている。

医師に科学性と人間性の両面を強く強調しているが、現代の医師はさらに明確に社会との契約により社会に対する説明責任をも求められている。

医師のプロフェッショナルリズムは、自律性を持ち、社会契約に基づいた医師という専門職の姿勢、構え、行動様式であり、その背景には健全な倫理観がある。

基本的には科学性、人間性、社会性の要素があり、適切にこれらが濃淡をもって具現化するのが診療場面である。常に振り返り、学習しながら向上をめざす姿勢、同僚や後輩への教育的な態度とともに、自己研鑽・自己規制などをやりぬく強い意思をどう現実の場面で持続していくか、研修する者も指導する者もよいロールモデルになるような不断の努力が必要であると考えられる。

チーム医療や患者中心の医療を行う現代では、もはや医師単独で「医師のプロフェッショナルリズム」を考えることはできない。社会の視点や医療を遂行する多くの職種との相互作用の中で考えていくことが必須である。

これまでの日本社会は身内への忠実を誓う倫理である「武士道」が中心であり、「仲間内の評判」を何よりも重視する「武士道」の倫理が、顧客軽視の食品偽装など、企業不祥事の背景にあるという説もあるが、一方、他人への誠実を重視する倫理である「商人道」では、売り手、買い手、世間の「三方よし」の精神、公正な商取引を善行としていて、貴賤の別なく人助けに尽力することが肝要という解釈もある。

「武士道」ではなく、他人にも自分にも利をもたらす商いを心がけ、グローバルな精神で世を渡る「商人道」（患者よし、医療者よし、社会よし）が現代にも引き継ぐべきあり方なのかもしれない。

しっかりしたIntegrity[高潔さ]を日々自らに振りかえりつつ、周囲の環境（組織の文化）醸成にも努めていくのが肝要である。